

乾吉佑文学部教授が学会賞(古澤賞)受賞

日本精神分析学会で

臨床心理士として40年間、精神神経科や大学学生相談室、企業分析学会第55回大会で、学会賞(古澤賞)を受賞した。長年にわたり精神医療・臨床心理の指導者として、精神分析・精神分析的な心理療法の実践・研究・教育を行い、数多くの後進を育成してきた功績に対して贈られたもの。



乾教授は、アイデンティティを確立するまでにさまざまな課題に直面する思春期・青年期に、治療の成果に大きくかかわる。信頼関係を築くために、クライ

年間の臨床経験が特に豊富であり、その実際は思春期・青年期の精神分析の「プロローグ」に出会いと「心理臨床」(2面・専修人の新しい本)に詳しく記されている。臨床、研究のかたわら、日本を代表する2つの精神分析セミナーの設立と運営にも携わってきた乾教授は、授与式後、「心の健康って何だろう」を講演。どのようなアクセスメント(治療方法)のよう

多摩区内で「まち」にかかわる活動をしている学生と市民団体の交流と活動の充実を目的に、報告会と交流会が12月5日、サテライトキャンパスで開かれた。神原理商学部教授や「地域通貨たま運営委員会」などで構成する「学生×まち」推進プロジェクトの主催で、本学からは、経済学部・徳田賢二ゼミの岡本祐輝さん(3年次)が長沢商店会

北島選手の敗北から学ぶこと

オリンピックで2大会連続2冠を成し遂げた北島選手が、1年3カ月ぶりに競技会に復帰した。北島選手は誰が認めていても、準備不足のため十分に力を発揮するに至らなかったが、先を見据えた本人の目には確かなものが映っている。本人にとっ

向けて自分自身の存在を確かめることは、目的地への近道でもある。北島選手は復帰戦で棄権することも考えたが、「ここは何しに来たのか?」と自問自答する。出場を選んだ彼らは日本人選手に負けず、準備不足では結果を伴うことができない。日々の努力に勝つものはないことを教える。我々も「ここは何しに来たのか?」と自問自答し、なりふり構わず周りの目を気にせず、勉強に励んでみるのも悪くないかもしれない。(学生部)

多摩区内で「まち」にかかわる活動をしている学生と市民団体の交流と活動の充実を目的に、報告会と交流会が12月5日、サテライトキャンパスで開かれた。神原理商学部教授や「地域通貨たま運営委員会」などで構成する「学生×まち」推進プロジェクトの主催で、本学からは、経済学部・徳田賢二ゼミの岡本祐輝さん(3年次)が長沢商店会

第10回専修大学留学生日本語スピーチコンテストが11月17日、生田キャンパスで開催され、陳涯さん(中国・上海大学・文学部特別聴講生)が見事、第1位に輝いた。特別聴講生5人と学部生1人のあわせて6人の出場者が、日本に留学して人との触れ合いや異文化のなかで感じた驚きや生き生きとした日本語で語った。



第1位は特別聴講生の陳涯さん(中国)は入学間もないが、切に教えてもらったうれしさを、滑らかな日本語で行き方を、見知らぬ専大で披露した。

「日本語の『すみません』は、どんな時にも使うことができる。とても便利な言葉です」と切り出し、勇気をもって声を掛けることが大切。そこから人と人との絆ができていく。審査員の先生を囲んで出場者のみなさん

「すみません」は、どんな時にも使うことができる。とても便利な言葉です」と切り出し、勇気をもって声を掛けることが大切。そこから人と人との絆ができていく。審査員の先生を囲んで出場者のみなさん

「すみません」は、どんな時にも使うことができる。とても便利な言葉です」と切り出し、勇気をもって声を掛けることが大切。そこから人と人との絆ができていく。審査員の先生を囲んで出場者のみなさん

ゲータイ世代が『軍事郵便』と格闘



戦時中、戦地に赴いた兵士と家族や親しい人との間で交わされた軍事郵便などを展示する『いのちの便り展』が11月9日から21日まで専修大学サテライトキャンパスで開催され、連日多くの人々が訪れた。

「いのちの便り展」でギャラリートーク。新井ゼミの研究や本展の開催、成果の出版は、全開紙や地方紙に「ゲータイ世代が軍事郵便と格闘」などと紹介された。新井研究室には「私の家にも軍事郵便が残っている」との申し出が多数寄せられた。

同14日には、新井教授のギャラリートークが行われた。軍事郵便の収集と研究を行っている新井教授は「軍の上層部ではない最前線にいた兵士と市民の戦争観を知ることができると、兵士と同年代の学生たちが軍事郵便を読み解く意義を語り、会場の展覧物を解説した」と写真。

新井ゼミの研究や本展の開催、成果の出版は、全開紙や地方紙に「ゲータイ世代が軍事郵便と格闘」などと紹介された。新井研究室には「私の家にも軍事郵便が残っている」との申し出が多数寄せられた。

専大とともに 神田神保町探索



店内には吉田茂や片山哲ら名政治家の書も掲げられ。中央が齋藤彰社長。左・弟の夫治雄さん、右・長男の征一さん

神保町古書街の一角にある老舗書道用具店・玉川堂。文政元(1818)年、筆・墨・硯・紙の専門店として九段下の中坂(九段北1丁目)に創業。明治末に現在の地に移った。里見八犬伝の滝沢馬琴や、夏目漱石、永井荷風、与謝野晶子ら多くの文人や墨客に愛されてきた。

文房四宝の専門店 使いこなすことによって一生ものに。玉川堂。そんな由緒ある店の店内は、文房四宝がぎっしりと並び、特に大ききさまの筆をどうえには圧倒される。「筆は使えば使うほど鍛錬され、つやが出て研ぎ澄まされた体になります。人間と同じです。用途にあわせて自分の一本を持って使いこなせば、一生ものですよ」。笑顔で語る8代目社長の齋藤彰さん。店を訪れる初心者から専門家まで、懇切丁寧にアドバイスする。昨今、同店の客層にも変化がみえる。「外国のお客さんが増えました。スウェーデン、ロシア、アメリカ、タイ。その造詣の深さは日本人以上の方も。日本の文化を外国人から教わる。そんな時代がくるかもしれない」。パソコンの普及で現代人の文字離れ、書離れが著しい。「手ではなく機械で覚えた文字は身につけません。残念なことですが、しかし、行き着くところまでいったら必ず『揺り戻し』があると信じます。古いものを見直し、本物はやはりいい、とおっしゃるお客様はたくさんいらっしゃいます。絵手紙ブームもチャンス。こちらは間口を広げてお迎えしております」

田区神田神保町3-3-3 03(3264)3741